

テンコツさん一家

長谷川時雨

青空文庫

——老母よりの書信——

ねずみこぞう

鼠小僧の家は、神田和泉町ではなく、日本橋区和

いずみちよう

泉町、人形町通り左側大通りが和泉町で、その手前の
小路が三光新道、向側——人形町通りを中にはさんで
右側大通りが塚町、^{および}及がくや新道、水天宮は明治七、
八年から芝三田辺より来られ候。

三光新道が鼠小僧の家、母親と妹がすまってるて、妹
には旦那^{だんな}があつて、その旦那の来てゐる時は、表のこ
うし戸の前に万年草の植木鉢が出してある。鼠小僧は
小がらな、うすあばたのある、ちいさなよき男のよし、

その母は引廻しの日にとつといお寺へ参つて坊さんになつたさうです。祖母おばあさんの若いころには堺町に芝居が三座あり、その外人形座もあり、かげま茶屋といふものもあつたよしに候。

私は微笑した。こんなつまらない事ではあるが、他人のいつた事が正しいような気がして無意識に従うことがある。実は、前章の末に書いた鼠小僧のくだんの中に、神田和泉町と書いたのは何こ処かに目に残っていた文字をそのまま書いてしまったのだつた。講釈本からかも知れない。あるいは戯曲の台本などからかも知れない。

和泉橋は今でも神田と下谷したやにかけてかかっている。和泉町とい
 えば神田の方がゴロがよい、というわけでもあるまいが、日本橋
 区内の和泉町は知る人がすけない。そこで、ちつとばかり古い事
 を並べて見ると、本編最初からお馴染なじみになつてゐる大門通りは、
 廓くわくわの大門の通りなのだから大門おおもんとよんでください。芝にも大門
 があるがあれは大門だいもんである。

日本の首都である東京の日本橋の中央の大問屋町が、遊女屋町
 吉原の大門通りであつて、堺町、和泉町、浪花町なにわちやう、住吉町、大
 坂町でとんで伊勢町など、みんな関西から出稼いせぎ——遊女屋の出
 身地だとばかりはいわれまいが——人の地名から來ている。長谷
 川町は大和からの名であろうが、其処そこには長谷川という大きな木

綿問屋が現今いまでもある。

よしちよう 葭町

を廓の中心地とすると、人形町の名がどうやらわかっ

てくる。人形屋もありはあつたが、

むろまちじっけんだな 室町十軒店

の方が有名で

もあり、数も多い。ここの人形商はおやま商業あきないであつたことが

わかる。おやしほし 親父橋が渡しで廓がよいに不便だろうと、遊女屋側か

らかけたので、遊人それを徳とし、その特志家を——実は商業上

手を、おやしおやしと尊称した名が残つたのであると記録にもあ

る。このよし原が浅草田圃たんぼに移され、新吉原となつてからでも、

享樂地としては人形町通りを境にして親父橋寄りに、葭町、堺町、

葺屋町側ふきやに三座やぐらの櫓があり、かげま茶屋、色子いろこ、比丘尼びくにが繁はんじよ

昌うした。今では反対の側の住吉町、浪花町の方に芸妓屋がのこ

り、明治の末大正にかけて、かきがら町に私娼、大正芸妓があつた。

新吉原は浅草公園を外苑地帯として根を張り、あとから移転していった芝居——山之宿の市村座、とりこえ鳥越の中村座など、激しい時代転歩にサツサと押流され、せきじつ昔日の夢のあととは失なくなつてしまつたが、堺町、葺屋町の江戸三座が、新吉原附近に移るには間まがあつた。古い廓のロマンスというようなものが残っていたかといふと、私知かむろっているのは禿かむろが池かむろというのが大門通りの突当り、住吉町の地尻じちりにあつた。今でも何か神社が残っているであろうが、かなり広い池をもつた社やしろで神楽堂かぐらどうが池の中にあつた。昔日はもつともつと大きな池だつたときいていたが、埋うめたて立たてられて、

清元家内太夫の家や、芸妓屋や、お妾めかけさんの家がギツシリと建つてしまった。向側に粹いきなうなぎやがあつたが、そうなつては掛かけあ行い燈どんの風致ふうちもなにもなくなつてしまった。この池に悲しい禿かむろが沈んだのだということが子供心を湿らせたに過ぎない。

テンコツさん一家に対して、あまり長い前置詞であるが、この池尻りの向う一帯が、松島町という細民の部落で、その附近にこの一家が散在していたからだ。

とはいへ、私は松島町の姿を多くは知らない。よく見ておくべきだったが、子供心にはそんな欲心がない。中島座という小芝居が非常に繁昌した——それも目で見たより、家の人というのが耳

に残っていた方がかっている。

テンコツさん森口嘉造氏はそこら一帯の大屋さんで、口利きで、対談事、訴訟にもおくれをとらぬ人、故松助演じるころの『梅つ雨小袖』の白木屋お駒の髪結かみゆい新三をとちめる大屋さん、鰹かつおは片身もらってゆくよの型タイプで、もちつとゴツクした、ガツチリした才さいいづち槌頭あたまである。テンコツさんのいわれは知らない。一度何のことかと父に訊きいたら、拳固げんこをかためて頭のところへもつていったようなことをしたが、私にはなんのことなのか分つたようで訊わからなかつた。たぶん、頭がかたい——頑迷だというのかも知れない。母にきいたら、頭の脳のうてん天てんに丁字鬚ちよんまげをのせていたのだともいった。

テンコツさんの住居は、中島座の通りで、露路にはいった突当りだった。露路口に総後架そうこうかの扉とのような粗末な木戸があった。入口に三間間口まぐち位な猿小屋があった。大猿小猿が幾段かにつながれていて、おかみさんが忙せわしなく食たべものの世話をしていた。人参やお芋を見物のやる棒のついた板の上に運んでいた。私ははじめ猿芝居かと思っていたがそうではなく、と行って、見物に小銭で食物をやらせるのばかりが商業でなく、猿を買出しにくる人もあったかも知れないが、貸猿がおもなのだから、猿廻しの問屋とでもいったらよいかもしれない。

ざわざわと人の多い、至るところ細い道だった。毎年冬になると鯨くじらの味噌漬たるの樽たるがテンコツさんからの到来ものだった。大橋の

下へ船がついたからとりについてくれといつてよこした。で、このせまい町から、ある年の冬火事をだしたおり、荷物は大橋から船へ積みと手伝いにゆく者たちはいつていた。

その時の火事は大きかった。江戸時代の残物で、日本橋区内のコブであつた汚きたない町が一掃されたが、哀れな焼け出されも沢山あつた。一度眠つた私の家が叩たたき起された時は、大門通り一ぱい火の子がかぶつていた。家々では大提ちようちん燈を出して店の灯を明るくした。酒屋はせわしげで、蕎麦屋そばやは火をおこし、おでんの屋台はさかんに湯気ゆげをたてた。纏まとがくる、梯子はしごがつづく、各組の火消けしが提燈をふりかざして続いてくる。見舞人が飛ぶ。とても大通りは通られはしない。

子供たちは角に立つて、ガクガクして飛んできておちくだける火の子の華はなを眺めていた。火喰ひくいどり鳥が空をまわってるからこの火事は大きくなるなどろくな事はいわなかった。でなくてもこの火事はあるべきものとしてこの近辺の者には予想されていたのだ。松島町の方に火柱がたつということは毎夜噂うわさされていた。祖母をさすりに毎晩交替でくる、栄良だの栄信だのという小あんまたちまでが、自分たちも見たように咄はなすのだった。私たちも怖こわごと々夜更けに出て見たことがある。そういえば気のせいか、下方は見えないで、一抱え以上もある火気が——丸い柱が、ポツと立っているように思えたのだった。

書生たちは早くからあつまってきた。河岸かしを廻って細川様（浜

町清正公様)のさきから、火事場の裏からでなければはいれまいと父も洋服を着て出ていった(その前までは刺^{さし}つ子を着るのだったが)。火事場の中には、テンコツさん一家の一人に、肺病で寝ている、来春大学を出る法律書生の、父のたつた一人の甥^{おい}もいたから、家のものは案じきつていた。

と、大通りの勢いのよい人たちに突きのめされながら、薄いきもの一枚で、葛籠^{つづら}を肩にした青い少年がフラフラと現われた。待ちには待つていたが、手厚く連れてこられるものとして待ちかまえていた女たちはそれを見ると戦慄^{ふるえ}た。長^{なが}病^{わづらい}の少年が——火^や葬^{きば}場の薬^{くすり}までもらおうというものが、この夜寒に、——しかも重い病人に、荷物をもたせて、綿のはいったものもきせず——

母はひとりこひとり一人子一人なのに——なにがほしいんだ、祖母はグツと胸

に来たらしかつた。全然肌はだあい合のちがう嫁ではあるが——祖母には、その少年がたつた一人の男の孫であり、その子の母親は私の父の兄の後妻であつた。父の兄は維新後の世の中のゴタゴタのころ、懐に金を入れて出たまま行衛ゆくえ不明になつて、幼子と後妻だけが残つたのを、家を売つた金や残りのものと一緒に実家さとかたの兄、テンコツさんの近くへいつていた。

少年は暖かい床に入れられ、私の母に静かにさすられていた。祖母はやがて帰ってくる、自分の子でも私の父には、少年が背負されて来た葛籠は見せたくなかつた。

「おやそ、こんな葛籠はなぜ焼いてしまわなかつた。お前はなぜ

猪いの之をおぶつてすぐに来なかつた。」

と、少年の母が来るとすぐ祖母は激しくいつた。だが、いかにも後家相ごけそうをした、色の黒い、小欲で眼の光っている、瘦やせた長顔の、綿入れを三枚重ねて着て、もてるだけの荷物の包を両手にさげて、転がったら最後焼け死んでしまいそうなかたちしたおやそさんは、いまや息子のことよりは荷物だつた。

「葛籠くわろうはまいりましたか？」
と洒然けろりとして訊たずねた。

哀れな少年猪之さんは寒夜の火事と、重い葛籠が災あいして死んでしまった。

テンコツさんは大屋さんから立派な家主さんに代った。人形町通りも半分焼けたので銀座に似た煉瓦建れんがだてになった。その幾軒かはテンコツさんの持家であつた。住居も紳士風にした。石のようようかんな羊糞ようかんを紙に包んでくれなくなつた。

大きな納屋なや——物置きが母屋から離れたところに出来たと思つたらその隅に床をつくり、畳を二畳ばかり敷いておやそさんのいとところが出来た。沢庵桶たくあんおけや漬け菜との同居である。あんまりの事に、こんどは私の母が不服だつた。

「家からの仕送りが毎月行くのに、まるで……」

そんな年齢でもなかつたであらうに、おやそさんは鼠ねずみの骨のようにほしかたまつていた。でも何かあると、例の葛籠の中に焼け

のこつた裾模様の派手なのを着てくるのではたのものの方が困っていた。彼女の嫁入り衣裳いしやうなのだから、いかに黒の紋附でも悲惨だった。

おやそさんは忠実に雇われてきた。夜でも急用があるといえ、はば中の広い木綿じまの前掛けをかけて、ちようちん提灯をさげて、ほうば朴歯をならして、つつま謹しやかに通つてきた。袋物商の娘だったので、袋ものをキチンとつくつた。私たちのお弁当箱の袋や、祖母のきんちや巾着くを気に入るようにつくりあげた。或日ある、そのおやそさんが、クドクド祖母や母を説いていた結果が、六つの年からあがつた長唄の師匠をとりかえられる事になった。おやそさんの姪めいが、杵屋きねや勝梅という名取りになつたが、まだよい弟子がないのだというの

だ。

私の長唄のおしよさん六喜美さんは、眼玉にホクロのあるような目で、背中が丸くて、猫がコウバコをつくったようなお婆さんだったが、後取りあととにする内弟子のふうちゃんより、名取りのおなつちゃんより私を可愛がって、御自慢で附合さくら浚いいに連れ廻った。

鉄砲町の百瀬ももせという接骨医の裏にいたが、半片はんぺんを三角にきつて煮附につけたお菜をわけてくれて、絵硝子ガラスのはまった行燈あんどんのわきで

一緒に御膳をたべさせるのを楽しみにしていた。お浚いいの時は、

二間の戸棚を開けはなし、中央まんなかの柱を上だけぬいて山台やまだいにす

る。十錢札や二十錢札——この間中あつたのとは違った——が廃やめられる時、戸棚の方へむかって、そつと勘定していたが、部厚

なのを見せて、誰にもいってはいけないよといった。大きな、ど
てらを着ていた背中を忘れない。その親しみのある人から離そう
というのだから、私は厭いやだといった。では、どっちのおしよさん
にもやらないと母は叱った。

浪花町なにわの裏にいた勝梅さんも、焼け出された一家だから、三味
線よりほかなんにも持つてなかった。兄さんは叔母おばのおやそさん
そつくりの人で、肺病かもしれないなかった。だんまりで袋物の細工
をして、時折トントンと小さい木槌きづちの音をたてるばかりだった。
母親がおやそさんやテンコツさんの姉さんで、額の大きい、落ち
くぼんだ大きな眼——この人は美人だったと思われたが、しどく

しどく貧乏にやつれて、骸骨がいこつみたいな顔をしていた。おきみさんという娘は父親似で、大きなふっくりした顔と、フンダンな髪の毛をもっていたが、人がよすぎてポンとしていた。父親の善兵衛さんは、名の通りの人物で、今なら差当り、クラシカルなモデルにでも役にたとうが、そのころでは高い鼻と豊ほうきよう頬ほとのもちぐさりで、水鼻をたらし、水天宮様のお札を製造する内職よりほか仕事がなかった。

「六喜美さんは好いお弟子が沢山あるけれど、勝梅さんはお前が
いかないと困るのだから。」

と説きおとされて厭々通うことになった。最初は何も教えてはくれなかった。毎日々、二段ずつお浚さらいのように唄うたわされた。まあ、

助六を知っていますか？　ではそれを——かんじんちよう勸進帳も？　牛若も？　まあ、あれも？　これも？　いい声だいい声だとそやされて無中になって唄った。しまいには、兄さんが体がわるいので気むずかしいが、やっちゃんの唄をきくと大層よろこぶからと——これはてい体のよいおとりで、窓はいつもあけはなちすだれ簾だけにしてあったから人だかりがした。そのうちポツポツお弟子が出来てきた。

お弟子の種類が所がらで面白い、水天宮様のおきよめ——門前で五の日五の日に、神前へそなえる小さいおそなえもち供餅を細い白紙でちよいと結んで売る商売、中には売色で名高い女もあつた。年と増しまの芸妓の手ほどきなどで、そのうち裏から表通りへ越すようになった。階下したが住居で二階が稽古場、壁きたが汚ないので古新聞を一

ぱいに善兵衛おじいさんが張ってくれた。勝梅さんは色白の毛の薄い大あばたで、眼が見えないから、壁の汚ないのは平気だが、子供のくせに潔癖性で、気味悪げに私が見廻すので、来なくなるといけないからと、大ふんぱつで張ってくれたのだった。

三味線が二張に見^{けんたい}台。そのほかは壁の隅に天理王を祭った白木の小机があるだけ。私はお稽古を待っているうち中、うらさびしさにボンヤリしていた。六喜美さんのところは上り口に赤い鼻緒のポツクリが足も入れられないほど並んで、入口の三畳でふうちやんが下ざらいをしているし、八畳の隅でなつちやんが出来ない子に撥^{ぼち}をもつてやって教えているし、おしよさんの前にはあとからあとからとおじぎをして出てゆくし、私は縁側で、千なりほ

おずきをとつたり、石せき 菖しょう に水をやつたりして怒られたり褒ほめられたり、お手だまをとつたり、みんなで鞆まりをかがつたり、千代紙で畳んだ香箱へ、唄の出来ないところへ貼はりつける細かい紙を刻んだり、おちぢれをこしらえたり、お三宝だの菊皿だのと、時間なんて気にもしなかつたのに——だが、古新聞はそれらにました悦よろこびを与えた。あたしは善兵衛さんに手伝つて、いつになく機嫌よく壁張りの手伝いや見物や助言をした。それは逆さまだ、こちの面ほうへ糊のりをつけた方がよいのと。

古新聞が壁にはられてからあたしはせつせと稽古に通うようになった。番がきてもなかなか座らない。おまけにお弟子がすけないからいつも私の番がすぐにある。私は這はい入つてゆくにも足音を

忍ばせて、こんちはも言わないで壁にゆく。勝梅さんは内職の糸の編物をしているが、勘のよい盲目めくらさんで、ニヤニヤ笑いながらいった。

「おやつちゃん、はじめましょう。」

あたしの背の——目のとどくところのうちは無事だったが、とうとう天理様の机がもちだされることになった。それでたりずに見台まで、鼠がひくようにひっぱった。勝梅さんが不思議がつて探り廻しだしたのに吃驚びっくりした私は二ツ重ねた足台からおっこつて、階下の人を驚かせ、二階へ駈かけ上らせた。勿もったい体ないといって盲目さんは泣いた。階下からは兄さんが、かわりの読物をかしてくれた。たしか『都の花』という新聞の附録だったが、苦しい生

活を知らないあたしは遠慮もなく頁をあわせて立ちきつてしまったので、コチコチの兄さんがかんしやくだま疔癬玉を破裂させて梯子段はしごだんからどなり上つて来た。だが、何が彼をそんなに怒らせたのか分らなかった。

『都の花』は近所からの借ものだったのだ。あたしはまた高いところの古新聞を読んだ。かわや廁のはどうにもならないが、梯子段の近辺は手すりにのぼった。窓の近くは窓にのぼり、欄間に手をかけてやもり屋守の這うかたちでした。向側のキリ昆布屋から危なくて見ていられないと苦情を申込んで来たので、また兄貴どなが唶鳴った。翌日ゆくと、善兵衛おじいさんがまた股の間へすりばち摺鉢を入れて、赤っばい大きなお団子だんごをゴロゴロやっているの、摺鉢をおさえてやり

ながら、なににするのだときくと、ただニヤニヤ笑っていたが、やがて、古新聞がお団子色にぬりたてられた。

兄さんが死んで、おきねさんが三ツ輪に結つて、浅黄がのこをかけてお齒黒をつけて、どこかみだらな顔つきになったが、それも見えなくなった。骸骨がいこつの顔に大きな即効紙を張つたおばあさんも死んだ、善兵衛さんはどうしたのか、勝梅さんは天理教をやめて耶蘇ヤソになったといった。外国婦人につれられて歩いているのを見かけたといったものもある。

おやそさんに、も一人の姉さんがあつた。やっぱり近所に住んでいたが、みんな後家ごけさん——後家ごけさんはお母つかさん一人で、あと

は老嬢おうるどみすだつたのかも知れないが、女ばかりよつたり四人してキッチン

と住んでいた。おやこ母子なのだから姉妹なのだからアンポンタンにはわか

らないほど、梯子段はしごだんのようにだんだん年をとつた四人だつた。

一番若い下の娘だけが廿二、三でもあつたのだろうが、一体に黒

っぽいおつくりの時代で、ことにテンコツさん一家だから花の香

はなかつた。大きいおうるどみすがおとよさんといつて学校の先

生だつた。ちゆうぐらい中位のおうるどみすも教師だつた。下のミスも先

生になりかけていた。お母さんだけが台所をしていた。この女ば

かりの家は用心堅固で、貧乏が入りこまないようにしていた。大

きいミスの名が通りものになつて、おとよさんの家と呼んでいた。

善兵衛がおひとよしだから姉さんはあんなになつてしまつてと、

おやそさんは言ったが、勝梅さんのお母さんつかよりおやそさんの方がよっぽど貧乏性だった。

おやそさんは、あたしの祖母がなくなつたとき、ねがん棺が来たら蓋ふたをとつて見て、

「まあ結構な——どれまあ。ちよいとお初はつに入れて見せて頂いて——どんな具合だかおあんばいを」

と中にはいって横ねてに寝て言った。

「なんて楽なことで御座ございましょう。お布団はふくふくして、なんともうされないよい気持ちで御座います。おばあ様にあやかりまして、私も極楽おうじよう往生せいじよういたしますように。」

なまいだ、なまいだ、なまいだ、と棺から出てきてもそらねんぶつ空念仏を言いつづけていた。

おやそさんが、つけものおけ漬物桶と同居して死んだ時、十本の指に十本、手首にも結びつけていたひも紐がある。その紐はみんな寐床の下から出ていた。死体を棺に入れたら床の下からずると幾つものき巾着んちやくが引きずられて畳をは這った。貸金の証文、かぎ鍵類、お札の入れたの、銀貨の入れたの、銅貨の入れたの、穴のあいたビタ銭のまでであった。大概のものは棺の中へ一所に入れて、現金は何ど処へか寄附された。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※「老母よりの書信」は旧仮名遣いになっていますが、ルビにつきましては、岩波文庫編集部の方針「現代仮名づかいで振り仮名を付す」に従い「いずみちよう」としました。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年7月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

テンコツさん一家

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>